

## 伝統建築を生かしたまちづくり、ものづくりに学ぶ 信州名匠会研修旅行「埼玉・千葉県の建築を訪ねて」

信州名匠会の平成22年の研修旅行は、11月13・14日に31名が参加して行われ、埼玉と千葉の両県を訪ねた。川越市の町並み、佐倉市の武家屋敷など歴史的な建築物や景色などを見学した一方、鉄道博物館、国立歴史民俗博物館、サンライズ九十九里、海ほたるPAといった現代建築の現場にも身を置き、匠としてのものづくりのあり方を、じっくりと考える2日間になった。



国民宿舎サンライズ九十九里にて（設計：宮本忠長建築設計事務所）

### 「重伝建地区」指定から10周年の川越。電柱・電線の地中化で美しい町並みに



川越の町並み・まちづくりについて、「川越蔵の会」の荒牧澄多氏に説明していただきながら見学

この町並みは平成11年に文化庁の「重要伝統的建造物群保存地区」に指定され、10周年を迎えた。平成4年には、電柱・電線の地中埋設工事が完了。すっきりとした町並みに生まれ変わった。

大江戸（東京）に対し小江戸と呼ばれる川越、その市街地に蔵造りの建物が並ぶ一角がある。「蔵造りの町並み」といわれる仲町から札の辻までの通り沿いには、それぞれ個性のある30数棟の蔵造りの商家が軒を連ねている。特に黒くて厚い壁、大きな鬼瓦と高い棟、風格のある蔵造りは圧巻。蔵造り以外にも、近代洋風建築や和風住宅、寺社、時の鐘など各時代を代表する多様な建築様式の建物が残る。「川越蔵の会」の馬場崇氏ほか4名に、「町並み委員会」の設立など、まちづくりの経緯・手法について詳しく説明をいただいた。

伝統建築の保存活動から始まったまちづくりの動きは、「商業がうまくいかなければ、生活を犠牲にしてまで蔵造りは残せない」ということから、凍結保存ではなく、古い物と新しい物が共生する町並み形成の道を歩み、現在のいきいきとした「蔵のまち川越」を創り出した。



蔵造りと近代洋風建築が融合した川越の町並み

# 研修旅行スナッツ

二日目に訪れた佐倉市では、城下町の面影をいまに残す武家屋敷通りを見学。道路に面して築かれた土塀や生垣に往時をしのんだ。旧河原家住宅は、市内に残る武家住宅の中で最も古いもの。展示された調度品に佐倉の武士の生活様式を垣間見ることができた。旧堀田邸は、最後の佐倉藩主、堀田正倫（まさとも）が、維新後に東京から佐倉に移り住んだ邸宅。明治期の庭師、伊藤彦右衛門による庭園部分は「さくら庭園」など、江戸から明治の職人の粋を集めた空間を堪能した。



鉄道博物館では、御料車など「匠の技」を堪能



国立歴史民俗博物館を見学



佐倉の武家屋敷



旧堀田邸にて

## 研修旅行日程

11月13日（土）長野市－川越市内町並み－鉄道博物館－航空科学博物館－ホテル（泊）

11月14日（日）ホテル－ホテル－佐倉武家屋敷・国立歴史民族博物館・旧堀田家住宅（さくら庭園）－サンライズ九十九里－海ほたるPA－長野市

## 平成22年度研修旅行「埼玉・千葉県を建築を訪ねて」参加者名簿（31名。氏名・所属・敬称略）

伊藤章・（有）アキプランニング、内山保・朝陽工芸（有）、大内健太郎・サンコー特機（株）、荻原弘司・（株）本久、久保敏幸・（株）さつき苑、坂田守夫・坂田工業（株）、佐藤満博・二見屋、高木茂美・松田・南信（株）、竹内公夫・（株）ビホームテクノクリエート、轟光洋・轟左官、鳥羽英夫・長野サウナ販売（株）中沢智・中沢康敏・（有）中沢建具店、中島重雄・中島高治・中島建築、中村泉・（有）ピーイング、西澤嘉雄・西澤重門・西澤哲也（有）エヌ設計、西澤広智・事務局・（株）宮本忠長建築設計事務所、増田幸雄・匠建設（株）、丸山正好・（株）綿内瓦工業、山田一忠・インテリア販売ヤマダ、赤嶺智教、新井啓明、上野裕司、上野真由美、関茂正、龍堀省三、水本盾夫、吉田広子

会員にきく  
「たくみの仕事」 Vol.19

## 匠たちを育て束ねる、指揮者のような匠像を追求する

株式会社シナノ大理石（長野市） 代表取締役社長 犬飼栄治氏

profile ●昭和22（1947）年5月24日生まれ、64歳。松本市出身。思い出の物件はメルパルク1階や、軽井沢のホテルエラル、ホテルガレエなど。陶芸や囲碁、読書にゴルフと多趣味。



本社長室にて

犬飼さんは中学まで松本市で暮らし、国立長野高専を卒業後、20歳で上京。森ビルに就職した。「いまでこそ100棟以上のビルを持っていますが、当時は社員27人、ビルは11棟だけでした」。冷暖房付き貸しビルの走り。「ビルの設備を勉強させてもらいました」。その後、営業を担当し、赤坂の再開発やリゾート地の開発をはじめ、不動産売買の仕事を手がけた。また、新ビル管理チームでは、大手ゼネコンの所長らとも毎週のように会議を重ね、「建設の仕事も勉強させてもらいました」。

32歳のときに結婚し、東京に一年ほどいた後、長野に戻った。ご夫人の父とシナノ大理石の立ち上げに奮闘する。「会社としては新参者。『棚板一枚から』

ということていろんなところへ顔を出して、やらせていただきました」。

石工事については、「石の仕事は『正解』がないけれども、失敗は許されない。石に関する基本的な知識から美的な要素まで。たとえば赤と黒の石をどう配色したらセンス良く見えるか—。そこまでやらないと匠にはなれない」。そう話すまなざしは真剣そのもの。

「石割付図一つとっても、実際の石は一枚一枚違う。石を貼っていくときに1段目で1mm違つと、上までいったときに何mmも空いてしまう。だから、1段目から神経をつかって何回も糸を見て、水平見て、立ちを見て、一枚一枚を慎重に取り付けていきます」。

後輩を育てるのも容易ではない。「そんなレベルにまで育てるには10年はかかります」。中国から働きに来た人も抱えている。彼らの不安は当面はお金。「やる気があるなら一緒にやろうよ」。そう声をかけてきた。「失敗してもいいからやってみろと。高い物をわざと割るやつはいません」。そう楽しそうに話す犬飼さんのもと、職人は自然と一つにまとまる。

「匠という言葉はとかく、他人よりよい物を作る人、他人のできないことをやれる人とイメージされがちです。しかし私みたいに、『いい物（適正な価格と品質）を、技能を持った人と組み合わせると、より良い建物や空間を創造する』…こんな指揮者（コンダクター）のような匠も、必要ではなからうかと、勝手に納得しています」。（栗原直良）



熟練の職人たちと図面を広げて打合せする犬飼さん

会員にきく  
「たくみの仕事」 Vol.20

「現場の入念な段取り」  
という凡事を積み上げる

匠建設株式会社（長野市） 代表取締役社長 増田幸雄氏

profile ● 昭和29（1954）年6月18日生まれ、57歳。長野市出身。趣味は水泳とゴルフ。



本社ショールームにて

昨年3月に匠建設の四代目社長に就任した増田さん。三代目の中村建一朗社長に見初められて入社した。「仕事は片付けから。真っ黒になって汗を流しながら。冬は寒くて嫌で。でも好きだったんだね」としみじみ。現場代理人から始めて、仕事はたたき上げで覚えた。

入社当時は木造だけだったが、2年目に鉄骨も扱うようになった。「30歳くらいまでは木造から離れていて、鉄骨きりでした」。鉄骨を手がける中で「施工図を描いたり、図面チェックを覚えました」。当時、社員は3名ほど。「図面描

きから段取りの手配、建築確認申請まで出しにいきました」。

仕事を通じての地道な勉強が実を結び、27歳で一級建築士に合格。ちょうどその頃、長野市発注の第一地区公民館や、安茂里の商業施設（地下1階・地上3階）の鉄骨の仕事を請けて「あれから自信が付いた」と振り返る。30歳の頃、一級施工管理技士の資格も取得した。「30代は本当に黙々とやりましたね」。

現場代理人として職人をまとめる。匠としてモノをつくる上で欠かせない技の一つだ。「一番は現場の段取り。前工程の仕事はその日にやり、明日の仕事の約束は必ず守りました。そうしないと職人は付いてこない。増田の言うことだったら間違いないと信頼を得ることで、彼らは付いてきてくれる」。

いま、会社のトップとしてすべてをまとめる立場となった。「葛藤があります。専務のときは社長がいましたから好きなことが言えました。いまは言葉に対してものすごく神経を使う。お客様に対しても従業員に対しても」。

施主の要望は大事にしつつも、ときにはアドバイスもするという。「一番はコミュニケーション。お客様ときちんとコミュニケーションをして引き渡す。事務的につくった建物には『魂』が入らない。気持ちが入ってこそ大事に使ってもらえますから」。そう話す増田さん。施主にとって本当に満足のいく家を提供したいという気持ちと日本の住宅文化に対する真摯な気持ち。どちらも欠かさない。そんな姿勢が垣間見えた。（栗田直良）



設計図面を見ながらスタッフと打合せ



# 定例研修会●Report

(平成22年12月～平成23年4月)

## 平成22年度 第5回研修会 【松田家資料保存整備事業 現場見学会】

平成22年12月11日(土)

講師：西澤 嘉雄氏 ((有)エヌ設計所長、当会理事)

参加者：26名

### 武水別神社の神職・松田家の保存整備事業を見学



新座敷で西澤嘉雄氏(手前右)より全体計画の説明を受ける

今回の研修会は、千曲市八幡の武水別神社西側にある松田家の保存整備事業を見学した。松田家は武水別神社の神職の家で、約2千坪の敷地内に20を超える建物が存在する。地元在住で事業に当初から関わって

こられた(有)エヌ設計の西澤嘉雄所長に、明治時代に時の県知事を招待するために造ったという「新座敷」で、松田家の歴史・保存整備事業の話をついた。当日は、武水別神社の新嘗祭、「大頭祭」の日でもあり、お祭りのにぎわいも味わった。

松田家の館跡は、東西約70m、南北約90m。敷地の南北西側には高さ約3mの土塁や、その廻りに堀も築かれ、中世の居館跡と推定されるという。発掘調査によると土塁は16世紀に築造されており、激戦だった第4次川中島の合戦をし

のばせる遺構といえる。平成16年には主屋が県宝に指定され、松田家では一帯を市に寄贈。江戸時代後期から明治期にわたって建てられた建物群や、堀、土塁のほか、一万数千点にのぼる古文書や書画、什器の散逸や滅失を防ぐため、市は17年から保存、整備事業を進めてきた。平成18年には県の史跡に指定されている。敷地内にある建物群のうち、主屋、料理の間、新座敷、味噌蔵、おたや(産屋)、西の蔵などがすでに復元を終えており、見学会当日は、隠居屋と北の土蔵の再生工事が進められていた。さらに、収蔵庫も新築されるという。市ではこうした修理工事を25年度までに完成させ、26年度から全体を博物館として公開する予定だ。

県宝に指定された主屋は、今回、資料整理のため、中を拝見することはできなかったが、建築部材の仕上げや建物の特徴から18世紀の建築とされ、19世紀に前半に現在の姿に改造されたものと考



新座敷の見学

えられるという。味噌蔵は、棟木に寛政6年(1794年)の墨書が見つかっている。料理の間は炊事用の建物で、西側の堀からこの料理の間を通過して東側の堀へと流れる水路が引かれており、脇に設けられた洗い場には水が溜まっていた。おたやや明治期に建てられたもので、お産や生理の忌み汚れを避けるために主屋から離れた位置にある。現在、整備中の北の土蔵は明治24年(1891年)の棟札があり、味噌蔵として使われたものとされている。

## 平成22年度 平成23年1月19日(水) 【新年会】 ホテルJALシティー長野「四川楼」 参加者 35名

### 信州名匠会のあり方をみんなで考える年に

会員同士の親睦を図り、一年の抱負を語り合う信州名匠会新年会が、例年にならって開催された。井内猛男副会長から「技を持つ人の集まりである信州名匠会のあり方をみんなで考える年としたい」の年頭のあいさつがあった。



和やかに語り合って親睦を深めた

## 平成22年度 第6回 研修会 【「宮澤さんの住まい」 —そと・うち環境を考える—】

平成23年2月17日(木)

講師：西澤 広智氏 (宮本忠長建築設計事務所 設計長)

嶋本 耕三氏 (宮本忠長建築設計事務所 設計主任)

国分 裕志氏 (信越ビーアイビー(株) 工事部長)

参加者：27名

### 住環境を考える—断熱工法再考



各講師の説明に聞き入る会員。

約15年前から西澤氏が携わる長野市近郊の新興住宅地「四季の杜」は、206戸の住宅分譲地である。「四季を感じ気持ち良い環境で暮らせるまち」を目指し「ソトはみんなのモノ、

ウチは自分達のモノ」という理念を住民みんなが共有して、一つひとつの住宅を造ることを試みた。まちの景観・環境を整えるため住民協定をつくり、各住宅の建設時には、施工者・施主に「住宅相談室」に来ていただき、建物と建物の関係性、間の空間についてアドバイスを受けてもらう仕組みを作った。結果、通常の新興住宅地には無い、緑豊かな環境・コミュニティの形成がなされた。

建物を計画する時、建物のことしか考えないことが多いが、常に向こう三軒両隣、周りとの関係を考えることの重要性

について改めて語られた。

宮澤さんの住まいは、この「四季の杜」の最終盤、一昨年に竣工した。四季の杜の理念に従い、通りに面し車庫の形態、緑地の取り方等を十分に配慮して計画された。敷地形状を生かし、建物東側に細長い庭が取られ、光が十分取り入れられる、風通しの良い家となっている。



引き分けの大きな開口部により、内外の空間が一体となる

宮澤邸で断熱工事を担当した断熱専門業者である信越BIBの国分氏から断熱工事の重要性、ポイントを宮澤邸の現場写真を使って説明いただいた。開口部も含めた断熱性能、住宅の寿命を著しく縮めてしまう内部結露を防ぐために内部側の気密層の重要性、外壁・屋根の外部側通気層の重要性について熱く語られた。

木造在来工法で、安易に所定の厚みの断熱材を入れれば事足りると思っている建築関係者がまだいるが、その危険性について語られた。本来の木造伝統工法(土壁木舞壁)の良さを見直し、この工法にあった断熱方法についても考えていくことも、今後は必要である。

最後に、今回採用された、空気ヒートポンプによるオール電化、冷暖房・給湯システムについて、宮澤邸の設備を担当した、ライフエンジニアリングの青野間社長から説明いただき、実際のランニングコストについても報告された。

## 平成22年度 第7回 研修会 【「会員集会」－これからの信州名匠会を考える－】

平成23年3月23日(水)

トイーゴ長野市生涯学習センター第3学習室

参加者：28名



白熱するグループディスカッション

初めて「会員集会」が行われた。

初めにくじ引きで5グループに分かれ、資料として配布された検討課題について、一人ひとりの意見を付箋に書き留めた後、グループディスカッションに入り意見交換を行った。休憩をはさみ、各グループの代表者が、それぞれグループで話し合われた内容を発表した。

「会員の仕事を観たり発表したりするような研修会を増や

### グループディスカッション、グループ発表で活発に意見を交換

信州名匠会は、今年19年目を迎え、今後を見据えた会の運営・事業の方向性等を会員みんな考えていく必要があるとの認識から、今回

したらどうか」「青年委員会・育成部会のようなものを新設し、若手の会員予備軍を育てたらどうか」といった、具体的な案が多く出され、活発な意見交換の場となった。

今回の意見(要約)がその後会員に配布され、さらに理事会でこれらの意見を生かした来年度の計画方針が話し合われ、次年度の総会議案を作成する。次年度も、今回のような会員の意見を聞く機会を増やし、より有意義な会にして行く方法・知恵を出し合っていきたい。

## 平成22年度 【理事会】

平成23年4月11日(月)

宮本忠長建築設計事務所

出席者：宮本会長ほか理事11名  
事務局2名、オブザーバー3名

3月23日の会員集会以外の意見を踏まえて、今後の「信州名匠会」の進む方向性、次年度の方針について話し合われた。

## 平成22年度 第8回 研修会 【雪しろ窯 陶芸教室】

平成23年4月23日(土)

講師：村越久子氏(上田市武石、雪しろ窯主宰、  
信州名匠会顧問)

参加者：19名

### 「ろくろ」に挑戦

会員の家族や仲間も含め大勢に参加していただき、今年も恒例の「陶芸教室」が行われた。咲き始めた桜と溪流の景色を楽しんだ後、自己紹介を交えながら和気あいあい村越先生に用意していただいた昼食を楽しんだ。4月に宮本忠長建築設計事務所を退職され、同時に名匠会事務局を辞める川向涼子さんに今までの感謝を込めてお祝いが贈られた。



思い思いの作品を仕上げる参加者たち

今年は、会員の希望もあり、はじめて「ろくろ」に3人が挑戦。村越先生に手取足取りご指導いただき、初めてとは思えない作品が出来上がった。また、それ以外の参加者も、事前に構想を練ってきて、淡々と制作に取り掛かる者、参考の作品を見ながら村越先生とスタッフの皆さんに教わりながら手探りで造り始める者。それぞれ無心にもものづくりの楽しさを感じながら2時間ほどでそれぞれ個性的な作品の形ができあがった。その後2カ月かけて乾燥、色付け、焼きをしていただき完成した作品が総会の会場に展示さる。参加者はどんな作品に焼きあがるか楽しみにしている。



村越先生に「ろくろ」の指導を受ける  
中村光敬氏